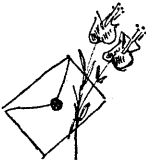


私の幼児教育論（その一）

下山田裕彦



はじめに

教育はこれだよいのだろうか、という思いに私はとらわれるのである。

(一)

われわれがたずさわっている幼児の教育は、この世の動きと無関係であつてよいのだろうか。われわれが生涯をかけてやらんとしている保育という営みはこの世の中にあつてどのような意味を持つているのであるか。この世の中にみられる矛盾や不合理を解決する為のなんらかの手立てを保育の営みの中で、われわれは追求する必要があるのではなからうか。確かに、子どもたちの中において、共に遊んでいる時、われわれは時にこの世の激しい移り変りを忘れがちである。このことを十分に承知しつつも、幼児の

私は倉橋惣三（一八八二—一九五五年）に限らない親しみを持つている。特に、内村鑑三（一八五九—一九三一年）の第一回夏期講演会（明治三十三年七月二十五日—八月三日、於角筭の女子独立学校）に小山内薫らと共に出席した若き日の倉橋（十八歳）の写真をみると、幼児教育の最高峰にいた倉橋惣三は、信仰上の私の先輩でもあったのだ、という驚きにも似た感動に包まれ

る。「(第一回夏期講談会)」の記念写真は「聖書之研究」(復刻版月報1に所収)

最前列右側から二番目に場所をしめている十八歳の倉橋はひきしまった顔立ちで、前方右側をじっと視つめている。

倉橋が内村から学んだ聖書の思想は「その考え方の根底において、その態度において、聖書の人生観が底流をなしていることを随所に見ることが出来る」(「幼稚園の歴史」二八一頁)との津守真氏の指摘のごとく、確かに無視出来ないであろう。問題は倉橋の把握した聖書の思想があくまでも、「神の愛・新しき心」・「嬰兒の心」に重きを置いている、ということである。(以上は、『聖書之研究』誌上に発表された若き日の倉橋の信仰告白とみてよいだろう。詳細は『聖書之研究』一二号(明治三十四年八月)から一六号(明治四十三年一月十五日)までの倉橋の文章を参照)言うまでもないことであるが、神の愛・新しき心・嬰兒の心は神の審判・怒り・義の実現と共に用いられる言葉である。若き日の倉橋の文章に神の審判・怒りという重要な聖書の思想を見出すことは困難である。このことは彼の保育思想から社会的性格を欠落させることになった、ということの意味するのである。何故なら、神の審判や神の義の貫徹という思想を欠くとき、自己の救いや自己の充実が最優先され、人間と社会の罪が徹底的に糾弾さ

れないままに、結局は自己を直接的に肯定することになるからである。

倉橋が約十年に及ぶ内村の忠実な門下生であったのにもかかわらず、内村の下を離れた理由を、現在のわれわれは知るべきがない。が、ここで注目すべきことは、倉橋が後年、日本の幼児教育界に展開した「自由保育」の根底にある「自己充実」は内村から学んだ聖書の思想に源をもつ概念である、ということである。だから、これを「神にある」自己充実と言いきることが出来る。しかしながら、倉橋の社会的地位の向上と共に、自己充実の前提条件である「神にある」は形骸化した。そして、そのことの故に、不幸にも彼は太平洋戦争の渦にまぎこまれていった。これは倉橋一人の挫折であるばかりか、日本の保育界の挫折でもあるだろう。つまり、日本の保育界の最高の指導者倉橋は同時にその代表者として責任を厳しく問われる立場にいたからである。

(二)

太平洋戦争は日本国民の全てをまきこんだ総力戦であった。だから、今更、過去の出来事を引きあいを出して云々することは建設的ではないと言う声もある。しかしながら、例えば次のごとき

弁護論を読むとき、過ぎ去ったことは忘れよという悪魔の声としてしか私には聞こえてこない。

『彼の文章に、時局に應ずる変化がはつきり見えだしたのは、

昭和十五年ごろからであった。……その当時の彼を一方的に、変節者であるとか、日和見主義的であると判断するのは、あまりにも酷であるといわねばなるまい。もともと、彼は性格的に、大胆不敵ではなく、争いを好まなかったが、何よりも先ず、彼が念頭に置いたことは、こうした時代において子どもたちを守るために、最低限度でも、くふうや努力をすることであろう』（坂元彦太郎著『倉橋惣三・その人と思想』フレーベル館 一四〇—一四一頁）

坂元氏の右の言葉は私の倉橋への率直な疑問や評価をも念頭に入れているのであろうか。誤解を避ける為にここでもう一度書いておこう。私は倉橋を「変節者」・「日和見主義的」と一方的に断定したことは一度もない。倉橋が内村の門下生であったということとの故に、私は限らない親近感を抱いている。だからこそ、私は倉橋のつまづきの内実を切に知りたいと思う。同時に、私は、若き倉橋が内村の下にあって体験した「自己充実」の何であったかをも推量したいと思う。それはおそらく一高、東大在学中の倉橋が彼の生命の全てを燃やしつくしても燃やしつくすことの出来な

かった感激の日々であったらうと、思いめぐらすのである。

『聖書之研究』（第三十三号・明治三十六年二月十日発刊）から引用しよう。

感謝の日記 倉橋惣三

一月廿三日、渡良瀬河沿岸の同胞を見舞ひて、読者諸氏より贈与品分配に立会ふべき任を負ひ、浅野君と共に午後新宿より出発す、発するに臨み内村先生戒め給ひけるは、分配につきては極めて不公平のあらざる様専ら心を用ぬざるべからずと、吾等は如何にして此の任を果たし得べきかを知らず、誠に身上にあまる任務なれば楽しみと心配と交々胸に通ふのみ、……

二十四日、愈々今日となれり。田中正造翁吾等を待ちて昨夜既に当家にあり給ふも、感冒の気味にて床より離れ難く、吾等は翁が分配場に從ひ得ざることを遺憾とせり。……

二十五日 安息日なり、忙しき安息日なり、吾等は今日安息日を迎へたるを感謝し、又安息日にかくの如く忙しきことを感謝せざるを得ず。……

この時、倉橋は十八歳、一高在学中であった。信仰の熱心に動かされて、田中正造にまで面会に出かけていった倉橋の面目躍如

たるものがある。

若き日の倉橋は「神にある」自己充実の中に日々を送ったことは確かである。これは晩年に至るまで倉橋の心を占領していた消しがたい思い出であったに違いない。何故なら彼が晩年の傑作『子供讃歌』の中で内村を「精神の師」としてなつかしく追憶しているからである。

(三)

内村との出会いによって、聖書の思想に触発された倉橋が日本の保育界にはたした貢献は絶大であった。特に、子どもを「人格的存在」として捉え、子どものもつ絶対的尊さに根拠をもつ保育論を展開したことは倉橋ならではの出来なかつたことであろう。

例えば次のごとき『一人の尊厳』を読むとき、私は無条件に感動する。

一人の尊厳

人間は一人として迎えられ、一人として遇せらるべき、当然の尊厳をもっている。ただに人間ばかりでなく、宇宙の一物といえども、もの皆個体の存在をもっているのであるが、人間におい

て、特にその尊厳をもつ。(中略)

今我等は、新しき子供を迎えた。一団の新入園児を迎えたのもなく、一組の新入学生を迎えたのでもない。我等の迎えたものは、その一人ひとりである。一人ひとり、人間としての一人の尊厳をもつて、我等らの前にあるのである。……(倉橋惣三選集第二卷三五頁)

これが発表されたのは大正十二年(一九二三年)、『幼児の教育』第二十二卷四号)のことであるから、倉橋四十一歳の時になる。

大正八年から十一年まで文部省在外研究員として欧米各国で研鑽を積んで帰国したばかりの倉橋が、柔らかなハートで、子どものもつ尊さをうったえるその情熱に、私は倉橋の心臓の鼓動を聞く思いである。倉橋のもつこのような心情の細やかさは聖書の世界の深刻無比な愛の広やかさと深さとに根拠をもつてであろう。

繊細な心で、傷ついた弱者を暖かく包みこむことの出来た倉橋が、何故、この世の矛盾、つまり、強者が弱者を踏みこむ悪の問題に鋭敏に気付かなかつたのだろうか。私が倉橋の保育思想に共感を覚え、その保育理論を今日の保育実践に継承せしめるその

筋道を模索する中で、とまどい、疑問に思うことは倉橋の保育思想における「社会的性格」の欠落という問題なのである。

それでは何故、倉橋の保育思想から「社会的性格」が欠落するに至ったのだろうか。それは、前述したように内村によって学んだ聖書の思想を倉橋が誤解して受けとっていたからなのである。

倉橋惣三の書物を読むことから始まった私の保育の研究は、ただ十年しかたっていない。それにもかかわらず、私は倉橋の保育思想における限界を指摘してきた。生前の倉橋と親しく接してきた今日の保育界の長老たちからみると、私のなしてきたことは僭越以外のなものでもなかったであろう。このことを十分承知しながらも、あえて、日本の幼児教育界の最高峰・倉橋の業績と足跡の限界を指摘してきたことにはそれだけの理由がある。

第一に、保育問題研究会のメンバーから、私は断片的な倉橋批判を聞かされてきた。

第二に、倉橋の息吹きに触れた人々から、倉橋批判を期待できない。

第三に、お茶の水女子大学やその附属幼稚園、あるいは本誌『幼児の教育』は倉橋と密接に関わってきただけに、倉橋に対する尊敬の余り、倉橋をつき離し対象化することの出来ない場に今

日もなお立たされている。

第四に、キリスト信徒・倉橋を彼の内側から理解する為には、聖書の思想に共鳴し、聖書の思想を生にかけてつらぬき通そうと、誓った人であることが望ましい。

右に列挙した第四の理由に私がふさわしいかどうかは、第三者の冷静な判断を待つ以外にはないだろう。

(四)

「私の幼児教育論」と題する論稿の中で、私は倉橋批判をして、いるに過ぎない、という印象を受けた読者もいるだろう。

私の幼児教育の研究は倉橋の業績を見直すことから始まったのであるから、私の作業は彼の限界を指摘するということをも含むのは当然であつたらう。

しかしながら、私の作業は過去に向けられているのではない。今日の保育界の動向を視野に包みつつ、日本の保育界の望ましいあり方を追求しているつもりである。このことが虚偽にならないように私が意図していることの一つを率直に述べることにしてう。

第三十回の日本保育学会（於、聖和女子大学）で私は倉橋惣三の保育理論研究——殊に「継承」の問題をめぐって——と題する口頭発表をした。その中で、私は山下俊郎氏のこと言及した。その部分を引用することにする。

「……日本保育学会の会長は倉橋から山下俊郎氏へと受け継がれていきました。ここで、倉橋の保育理論は山下会長へと継承されたかどうか、という仮説をたててみたいと思います。何故、これを問題にするかと言えば、宍戸健夫氏（愛知県立女子大学教授）が『現代の保育理論と幼児観』（『日本幼児』所収・明治図書）という論文を展開する中で、山下氏の思想について触れているからであります。

宍戸氏は山下氏の「幼児の家庭教育」一九四四年度版、つまり戦前版と一九五一年度版、つまり戦後版の両者の内容を詳細に比較検討しながら、山下氏の思想について批判しております。この論文が私を読んだのは一九六八年のことです。それから、今から約十年前、私が保育の勉強を始めた年であります。その為でしょうか、私はその時の驚き、動揺を今なお、昨日のごとく鮮明に覚えております。

宍戸氏は山下氏の「社会的適応」や「協力」という言葉にもらわれている内実を明らかにして、「山下俊郎氏自身きわめて社会に

適応している人間だということになるであろう（二〇六頁）と結論づけております。……」

このような批判を宍戸氏が公の場でなされたのであるから、山下氏もフェアに公の場で、この批判に應えるべきであろう。

右に引用した私の言葉も、言うまでもなく保育学界の最高責任者、山下氏への率直な批判である。

現存し、活躍している方への批判には愛と慎しみがなくてはならぬことを私は十分心得ているつもりである。が、今日のように学会がふくれ上り、時代の新しい難問に対処していかなければならぬ時、時代感覚の鋭い次の世代の人間に、学会の会長の座をゆるむ必要のあることを言外に含んだ批判であった。

つまり、研究者は生涯をつらぬいて生きる思想に忠実でなければならぬ、ということを私は言いたいのである。いつも権力の中核に近づいてきて、「自分」を持たぬ同僚を私は自分の近くにみてきているからである。

倉橋は確かに挫折した。その挫折の内実を検討することなしに、私は、「私の幼児教育論」の基礎を固められないでいる。何故なら、若き日の倉橋が内村と出会ったと同様、内村の高弟、矢内原忠雄を通して私は聖書の思想に触れたからである。（静岡大学）